

翻刻 ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵『源氏不審抄出』(上)

著者	宗祇, 伊永 好見
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要. 外国語・外国文学編, 文化学編, 日本語・日本文学編
巻	37
号	1
ページ	28-44
発行年	2013
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000149/

紀要 第三十七卷 第一号(通卷四十八号) 二八―四四(二〇一三)

翻刻ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵

『源氏不審抄出』(上)

伊 永 好 見

【凡例】

本稿は、宗祇著『源氏不審抄出』(函架番号 黒一 日一九六。全一冊)の翻刻である。奥書に「此抄出宗祇法師註也 桑門明融」とあり、上冷泉家歌人為和の子、明融(生年未詳―天正一〇1582年)が書写に関わることが知られる。今回は、桐壺巻から若菜下巻までの翻刻とし、解題等については、翻刻完了後に記す。

一、漢字の振り仮名、傍記、補入の記号等については、できるだけ原文のままとすることを原則とした。

一、底本の改行、字下げ、書入れ、ミセケチ、誤字、脱字等はそのままとした。

一、漢字の字体は通行のものに改めたが、「哥」等いくつかの異体字はそのままとした。

一、巻名の上に付されている朱点は「●」で示した。

一、ミセケチは「―」で示し、訂正の文字がある場合はその右側にルビで示した。

一、丁の変り目を「で」示し、丁数と表裏を、「一〇オのように示した。

【翻刻】

一、翻刻者の注記は、適宜()で示した。

源氏不審抄出

●きりつほ

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかに

此いつれの御時にかとかけけるは伊勢か家の集のはしめにいつれの御時にかありけんおほみやす所
おはしましけるとかけり七条の后宮の御事也
伊勢はその宮女たるによりて我ことを我とは

御ことを先かけり我身の事をも昔の

かきいてすしてきさいの宮の○やうにかきなせり

其心を紫式部思ひやるなるへしそうしてこの
「一オ

物語をは我かきたりとみえぬやうにつくりなしたる物なりまことにつくり物語の本意なるへし

うへもかきりなき御思ひとちにてなうとみ給ひ

そあやしくよそへきこえつへき心なんするな
めしとおほさてらうたくし給へつらつきまみなとは
いとようになりしゆへかよひてみえ給ふもにけな
からす○^{なん}なときこえつけ給へれば

うへもとは君のおほせらるゝ儀の事を先いふ
詞也かきりなき御思ひとちにてとは藤つほの
女御と源氏の君と思ひあひてうとみ給そと

おほせらるゝ事もつらつきまみなといとみいと
ようにたりしとはきりつほの更衣と源氏の

君との事もゆへかよひてみえ給ふもにけなから
すとは藤つほの女御の更衣にゝたまへる心なり
これはこの女御の御事を先帝の時の内侍の
すけ更衣にゝ給へるよし御心に申侍しその
ふてのゆくゑなりしかれば藤つほの宮と源氏と
もにかよひ給へる心にや

●は、き、

光源氏名のみことくしういひけたれ給ふとかおほか
なるにいと、かゝるすきことともを末の世にもきゝつた
へてかろひたる名をやなさんとしのひ給ひけるかく
ろへことをさへかたりつたへけん人の物いひさかなさよ
さるはいといたう世をはゝかり給ひけるほとなよひかに
おかしきことはなくてかた野の少将にはわらはれ
給ひけんかし

光源氏名のみことくしうとは源氏の君の事
をほめたる詞なりいひけたれ給ふとかおほかむなる

「一ウ

「二オ

にとは世中のならひにて名たかくいかめしき
人をもいひけつならひの儀なりいとゝかゝるすき事
とは好色の事もすゑの世にきゝつたへてかろひ
たる名をやなさんと源氏のかゝるかたの名を
忍び給ふ事もされとなをその名のきこゆる事

をいはんとてかくろへ事をさへかたりつたへけん人
の物いひさかなさよと紫式部かいへる詞なりかたり
つたへん人とは昔の人の心にかかりさるはいといた
く世をはゝかりまめたち給ひけるほとゝは源氏の
君好色の人なからうへに実をたてたる人にて
好色を忍び給ふゆへなよひかにおかしき事は

なしといへりそれをかた野の少将にはわらはれん
といへりかたのゝ少将の事古物語の名もおなし
時の人にはなけれと紫式部かとりあはせてくらへ
たる心也彼少将はうへ下なく好色の人也この
巻は始終ともにその心を得かたししかるあひた
一冊別にこれを注する物なり

●夕かほ

夕露にひもとく花は玉ほこのたよりにみえしえにこそ有けれ
返し

光ありとみし夕かほのうは露はたそかれ時の空めなりけり
この二首は夕かほのうへをとみなひてなにかしの
院におはしましけるときいまゝては御名をもし
のひかほをさへさやかにみせ給はす侍しをこゝにて
夕露にひもとく花はとの給へるはかほをさやかに

「二ウ

「三オ

「三ウ

みえ給ふ心也たよりにみえしえにこそありけれと
は心あてにそれかとそみるなど、いひかはし給し其
ことなり返し心はその折哥なとよみいて、

まいらせし事思ひ出るにはつかしきことなれ
はたそかれ時の空めなりけりとひかりあり
とみしことをもおほめきていへるおもしろくや

源氏○御心にもかなふとみえたり

「四オ

さらにこともなくしなせとその程のさほうの給へは何か
こと／＼しくすへきにも侍らすとてたつ

これは夕かほの君うせて後夕かほの上のさうそう
の事こともなくしなせと源氏の君おほせことある
はことをつゝめたるやうにきこゆさにては源氏
の御身に不足なるへしことなくと世のそしり

もなきやう○の給へる心也その御心を惟光うけ給り

て何かこと／＼しくもすへきとてたつとはおほ

せのことくは何かすへきしのひやかにと思心にて云り
「四ウ

竹の中に家はと、いふ鳥のふつゝかに鳴を聞給て
かのありし院にこの鳥のなきしをいとおそろしと
思ひたりしさまのおもかけにらうたくおほしいて
らるれば

此鳥のといへはその院にてき、給し鳥いゑはと、

きこゆそれはふくろうなるへし是もすこし

心得かたくやある説彼ありし院にこのといひ
きるやうにして鳥のなきしをといへは相違な
しといへりそれも又きゝくゝやたゝありし

ゐんにかゝる鳥のなきしなと大やうにいひて

「五オ

やしかるへからん一儀云此鳥家はとなるへしその
ゆへは彼院にてふくろうのなきしは夕かほうせ
ての事もおそろしと思ひたりしさまのおも
かけにらうたくおほしいてゝと侍れはふく
ろうとはきこえたゝ家はとのなく事

を先いひいてねとすることゝきこゆ

かやうのくた／＼しき事はあなちにかくろへしのひ
給しもいとおしくてみなもらしとゝめたるを
なとみかとの御子ならんからにみん人さへかたほなら
す物ほめかちなるとつくりことめきてとりなす
人ものし給ひければなんあまり物いひさかなきつま
ざりとこゝろなく

「五ウ

かやうのくた／＼しき事とは源氏の君の

好色のみちの色／＼のこと也あまりにはいかて

ともらせは又物ほめかちなりと世人のいへはかき

とむるよしをいへり世中の人の心のわりなきを

いへりこれもおほかた心得かたければしるしをける

はかりなり

●すゑつむ花

いくそたひ君かしゝまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに」

六オ

返し

かねつきてとちめむ事はさすかにてこたへまうきそかつはあやなき
これは源氏の君はしめてすゑつむのところへ

忍びおはしましけるに源氏の君の色くくの

ことの葉をつくし給へとさらに返事し給ぬ時

此事をよめりし、まとは無言の事也一向物な

いひそとのたまは、我も口とちてあるへきをもし

や返しし給ふと思ふゆへ又はことの葉をつくしく

し給ふ心を君か無言にまけぬらんとよめり返し

の心かねつきてとちむるとは児女子こきなどの無言

をする時かねにても何にてもうちてそれをさかひ

に無言する事也さやうにすへき事はなき

ゆへとちめむことはさすかにてといへりされとも源し

をはち給ふ心にてえいひ出ぬ事をこたへまう

きそかつはあちきなきといへる心なり

梅の花の色のことみかさの山のをとめをはすて、と

うたひすさひていて給ぬ命婦はいとおかしと思ふ心

しらぬ人くはなぞ御ひとりゑみはと、かめあへりあら

すさむき霜あさにかひねりこのめる花の色あひ

やみえつらん御つゝしり哥のいとおかしといへはあなち

なる事かなこの中にはほへる花もなき物を

左近の命婦ひこのうねめやましりつらんなど心も

得すいひしろふ

これはしはすのつこもりころ末つむより御きぬ

などを源氏へをくり給ひし時その身にかやうの

事さしすきたるとおほしてよろしからぬみ

けしきありしとき梅の花の色のこと、うた

ひ給へる也これは政事要略衛門尉(府力)の風俗の哥云

(元の紙を切り取り、同質の別紙を継ぐ)

多々良女の花の如加○以祢利好牟夜滅紫色

好牟夜といふ哥をたゝむめの花とかへての給

へりかひねりとは色紅也すゑつむの鼻の色

のあかきをいはんとての心也三笠の山のをとめ

をはすて、といへるはひたちの宮のをとめといはん

ため也末つむはひたちの宮の姫君なればなり先

三笠の山といふ事はもとめこの哥によりいへる也

もとめこの哥は諸社にてうたふときその所の名を

いふ事あり春日にては三笠の山のをとめことう

たふへきこと也たゝ三笠の山のをとめをは捨て

ひたちの宮のをとめといはまほしきの心也

されとあまりに、あはぬことにてはいはるましき

を春日の明神は常陸よりいて給たる御神也三笠

も鹿嶋もおなし御神三社なればそのたより

あるによりかくいへる也まことにこれは此物語の

秘注(一)に○みえさる事也師説(密)の蜜伝なり

●紅葉の賀

さうのことはなかのほそをのたへかたきをとて平調

にをしくたししらへ給ふ

此事心得かたくやたゝいまひき給ふへきかく

は長保楽の破保曾呂俱世利これ也別(別)のしら

へ平調よりはりたる調子なるへし中のほそを

は中のを也中のこのかみはなといへるたくひなる

へし此すゑにかたき調子ともをたゝ一わたり

「七才

「六ウ

「八才

「七ウ

「八ウ

にならひとり給ふとは色々の調子さたまるまし
きにや

●花のえん

名のりし給へいかてきこゆへきかうてやみなんととは
さりともおほさしとの給へは

うき身世にやかて消なは尋ても草のはらをとはしとや思
ことはりやきこえたかへたるもしかなとてとは

名のりせすとはしの心にてやとおほろ月夜の

「九才

の給へはその心にはなけれと先をんなの詞にことはりを
つけてされとしかくゝのいはれあるよしをいはんとて

しかなとてとはいへるにや侍らん

いつれそと露のやとりをとはんまに小篠か原に風もこそふけ

返しの哥の心はいつれそと露のやとりをととは、風

ふくさ、のうへはいかてそのやとりしらるへきといひ

きかする心也この哥の心にてしかなとてといふ詞

あらはるゝ物也

●あふひ

いとましからぬかさしあらそひかなとさうくしうおほ
「九ウ

せとかやうにいとおもなからぬ人はた人あひのり給へるに
つゝまれ〇はかなき御いらへも心やすくきこえむにまはゆし

これはみやす所の車あらそひの後祭の日源氏

の君紫の上をひとつ車にてまつり御覽せしに

車のたちとさしあひたりし時源内侍あふきを

さしいてゝ人をまねきてところさりきこえんと

申侍しかは所もよきわたりなれはいかて云給へる

そなとの給しときはかなしや人のかさせる葵
ゆへ神のゆるしの今日を待けるとよみてたてま

つりしにかさしける心そあたにおもほゆるやそうち
人になへてあふひをとよみ給へりしそのおり

おほくの女車侍し也源内侍とのかさしあらそひ

を御心につかて大かたの物みの女房車に哥などを

くり給ひけるなるへしいとましからぬかさしあら

そひさうくしうおほせとゝは源内侍の事を源氏

の君おほす心也かやうにいとおもなからぬ人

はたと源内侍をはおもなき人にさためて

かやうにおもなからぬ人とは源内侍かやうにおもな

からぬ人といふ心もおもなきとはおもてつれなき

心也さらぬ車などに源氏よりをとつれ給へと人

のりあひ給へるにつゝまれて心やすくはかなき

御いらへもせぬといへる心也此段のつゝきさらに

みえわかさる物也

かのいさよひのさやかなくさりし秋の事なとさらぬも
さまくゝのすきことゝもをくまなくいひあらはし

給ひてはてくゝは哀なる世をいひくゝてうちなきな

とし給ひけり

これはあふひのうへうせ給て後源氏の君

正日まていみにこもり給しとき頭中将おはし

て源氏の君とこしかたのすき事ともを

いひなくさめ給ひし事也かのいさよひのさやか

ならさりしとは二月十六日の夜すゑつむの

「一〇才

「一〇ウ

「一一才

きんの音き、給ふとき入方みせぬいさよひの
月と頭中将よみ給ひしこと也秋の事など

とはすゑつむに源氏の君あひそめ給へるあ
した朱雀院の行幸の事に源氏のかたへ

おはしてすなはち同車して内へまいり給ふ
ときねふたけに源氏のおはしましけるをた、
にはあらしなと、かめ給しこと也詞ひとつに

つゝきて心得にくき物也

「一一ウ

あないとをしおはおと、のうへないたうかろめ給ふそ
なといさめ給ふ物から

おはとはうはいふ心也おと、は殿也これは源内侍
か事を源氏君頭中将にあひての給へる詞也

源内侍をかくいへる事は老女なれば御心のされ事
におほせらるゝ事あるによりた、今かくの給へり

此事あさかほの巻にみえ侍り

たえま遠けれとさの物と成にたる御ふみなれば
とかなくて御らんせさす

「一二オ

これはあふひのうへうせ給へるころ源氏君左の
おと、のかたにてよろづ物哀なるころ齋院へわき

てこの暮こそ袖は露け、れ物思ふ秋はあまたへ
ぬれと、いへるその時のふみを齋院の女房のいへる

詞也たえま遠けれと、は源氏君齋院へ久しく
をとつれ給はぬ事也かくをとつれのたえぬれは
かならずすれいの思ひそめしことの給ふへきと思へと
この折はあふひのうへのなけきにその事はの給

はし折ふし哀なることの御をとつれにそあらん

と思ひてみせたてまつるよし也さの物といふ詞心
得かたくや是はさしすせその五音なるへし大方

「一二ウ

世上にそのやうなるといふことをさやうなるといふ
おなし詞也そのことくその物となりたると

いふ心なるへしその物とはその事といふ儀也心は
あふひのうへのいみにおはしませはさうく

しき心をなくさめ給はんとてまいらせらるゝ文と
思ふ心也源氏の君の艶書をは齋院のむつかし

からせ給ふ程にさもなき文とみるによりとか
なくてとはいへり

大うち山をは思ひやりきこえなからえやはとて

秋霧にたちをくれぬとき、しより時雨る空もいか、とそ思「一二オ

これもおなしいみにこもり給ふころ齋院へ

わきてこの暮こそ袖は露け、れなと読てまいら

せ給し返しの詞也おほうち山を思ひやりき

こえなからといへる心その理一条禪閣御説は

大将の直廬内裏なれば大内山といへりとあそ

はされたり又の説宇多御門北山の大小山に

ましくける時兼輔卿まいり給ひけるにたかき

所にて雲の立のほりけるさま物さひしき御す

まひをみたてまつりて白雲の九重にたつ

みねなれば大うち山といふにや有けんと読給し

その心もちて源氏の君の物さひしく籠り

おはするをかくいへりといふ儀あり直廬をさして

「一二ウ

おほせらるゝも如何又つきの説もありもとめ
たる事にや又説た、源氏君は内すみのみし給
人なれば大内山をとの給へるにや里におはし
ます折などの分別なく大やうにあそはし給ふ
なるへしと云々尤肝心なり

●さか木

神垣はしるしの杉もなき物をいかにまかへておれる櫛そ

「一四オ

これは御やす所野の宮におはしましける時
源氏君長月七日はかりに尋ましゝての給ふ

へきことの葉も限なければたゝいさゝか櫛を折て
もち給へるをさし入てかはらぬ色をしるへにて

こそとの給し時御息所の御哥也この哥さらに

聞えずやは古今に我宿は三輪の山もと恋しくは

とふらひきませ杉たてる門と明神の御哥也杉は

尋ぬへきしるしの心也今の哥にしるしの杉もなき

物をとほ尋給ふへきしるしもなき物といふ

心也いかにまかへておれるさかきそとはさかきは時

にあたりて源氏の折て入給へれはとりいつるまで也
「一四ウ

いかに思ひまかへて尋給ふそと恨いへる心なり

但如此ことは其身の所好によるへき歟

十七にて故宮にまいり廿にてをくれたてまつりいま冊

にて又九重をみ給ふ

これは斎宮伊勢にくたり給ふとき西川より

内へまいり給ふとき御息所もろともにまいり給ふ

時心にみやす所のおほす儀なり十七にて秋このむ

生れ給ふいま冊にてといへは秋このむは十四なるへし

源氏君は廿二歳也朱雀院の立坊は源氏君四歳

の時なり朱雀院の立坊十九年になれる故先坊
「一五オ

の立坊はるか昔たるへししかるを今十七にて故宮に

まいるなどいへる事大に相違せりかやうの事

講尺の時不審の輩あらはのかれかたき物也作り

物語なればかやうの所をはたゝこの巻のことに

なしてことをきはめんとせさらんやしかるへく

侍らん一禪の御注にも御不審はみえ侍りしかれとも

落着をはおほせられすはゝかりなから如此大やう

にてやしかるへく侍らん

あをむまはかりそひきかへぬ物にて女房などのみける

ところせうまいりつとひ給りしかむたちめなど

道をよきつゝむかひの大殿につとひ給ふ

むかひのおとゝは二条の右のおとゝの御所也今いへるは
「一五ウ

藤つほの三条の宮也むかひといふ事不審也

一禪に尋〇侍しに二条は三条のむかひなりと

御注あり愚見の儀にあらされとも花鳥の外なれ

はこゝにしるし入侍り

●花ちる里

御せうそこきこゆわかやかなるけしきともあまたして

おほめくなるへし郭公かたらふ声はそれなからあな

おほつかな五月雨の空ことさらにたととみればよしゝ
「一六オ

うへしかきねもとて出るを人しれぬ心にはねたくも

哀にも思けり

これは源氏君花ちる○おはしましけるおり中川
のほとりにかねて忍ひてかよひ給し所そと
み給てをちかへりえそしのはれぬほと、きす
ほのかたらひしやとのかきねにとの給し返し也
惟光ことさらにたるとみれはうへしききね
もとていつこのひき哥は花散し庭の木葉も
茂あひてうへしききねもみえすそ有ける
といふ哥をとりいて、いへりこれはことさらに
たとるとみれはと惟光か思ふははや源氏君に
心のかはりたてまつりけると思ふ心にてうへし
かきねもそれともみえねはよしさらはとおもひ
すつるやうの心になふへきにや

●須ま

むまやのおさにくしとらする人もありけるをま
しておちとまりぬへくなんおもひける

駅長莫驚時変改一栄一落是春秋

むまやのおさにくしとらすとは櫛にあらす

ことつてなるへし菅丞相なかせ給し時

あかしにて驛長なけきたてまつりし時此詩

をつくり給へりくしは口つからの詩也今大貳の

かたの者詩を作には侍らねと哀なることつて
などのあるをなすらへてくしといふにやまして

おちとまりぬへくなむ思ひけるとは五節の君

は源氏御思ひ人なりしかはこの浦にもとまら

まほしき心にこそ

「一六ウ

入かたの月かけすこくみゆるにた、これにしに
行なとひとりこち給ていつかたの雲路に我もま
とひななんとよみ給へり

「一七ウ

た、これにしにとはおなし御作に唯是西行
不左遷この心はた、自然の理也月のにしへめ
くるも我身の西都へおもむき給ふもかはる事
なき理にやその心をもちて源氏君も此詩
を詠て心をへ給へるとやいふへからん

故郷をいつれの春か行てみんうら山敷は帰るかりかね
宰相さらにたちいてん心ちせて

あかなくに雁の常世を立別花の都に道やまとはん
おりしも春の空なれはわかる、雁によそへて

源氏君の哥の侍れは又宰相の哥は我都へ

「一八ウ

行身なれは雁をわか身になすらふるによりて

こ、をわかるれはやかて雁のどこよといひなせり

●あかし

君はおほしめしまはすに夢うつ、さま／＼しつか

ならすさとしのやうなる事ともをきしかた行末

のこらすおほしあはせて世の人のき、つたへん後

のそしりやすからさるへきをは、かりてまことの神

のたすけにもあらんをそむく物ならは又これより

まさりて人わらはれなるめをやみんうつ、の人の

心たになをくるしはかなき事をもかつみつ、我より

よはひまさりもしはくらゐたかく時世のおほえいま

一きはまさる人にはなひきしたかひてその心むけをたとる

「一八ウ

へきなりけりしりそきてとかなしとこそ昔の

さかしき人もいひをきけれけにかくいのちをきはめ
世に又なきめのかきりをみつくしつさらに後の跡の
名をはふくともたけき事もあらし夢のうち

にも御心の御をしへなにことをかうたかはんとおほして

一禪の御注にはうつゝ、さまは世のつねさまなり

なをさり世のつねの人なりとも神のたすけを

そむかんはくるしかるへしいはんや我身のありさま

「一九オ

はかなき事ともをみあつめたることになりて

は世にしたかふへきはよからんとなり是は我身

をよのつねの人にてなき身そとの御注也

尤おもしろくやたゝし師説はうつゝ、の人の

心たに猶くるしきとは大方の人のいはん事

たにそむかんはくるしかるへしましてまことの

神のたすけにもあらんをそむきなはあしからん

とおほしとる心也時世のよせ一きはまさる人

にはとはあかしの入道のかしき人にて申事を

心にこめておほす儀也しりそかされはとかあり

といふ本文あり先入道のみちひきにまかせて

かの浦にうつりいよく朝家をうやまうへき

の御心にや侍らん

思ふらん心の程や、よいかにまたみぬ人のき、かなやまん

この哥はあかしの上に源氏君ふみつかはし給し

に返しなかりし後かさねていふせくも心に

物を思ふかなやよいかにととふ人もなみとよみて

つかはし給し時あかしの上の返しの哥也此哥

の心其理きこえず思ふらん心の程や、よいか

この上句はかく数ならぬ身にかゝる御せうそ

のあるをうたかひて思ふらん心の程や、よいか

といへりまたみぬ人のき、かなやまんとはよ

人もこれをきかは入道のむすめにかゝる文な

のあるはあるましき事にもと人もやき、なや

まんといふ心にや侍らん又源氏君心に物をな

むかなとあそはしたるをうけてまたみ給ぬ人の

き、なやみ給はんことをさもあらしなとおほ

きたる返しにやと云々

あかしには帰る波につけて御ふみつかはす

なけきつ、明石の浦に朝霧の立やと人をおもひやるかな

「二〇ウ

此哥心は源氏君あかしより舟にてのほり給し

かはあかしの上はるかなにかめをくりての心のうちを

おほしやる哥也人丸か嶋かくれ行舟をしそ思ふ

とよめる哥は明石の浦にして思ふ人のこき出し

名残をしたふ哥なればあかしのうへのいまの心人丸

か心とひとしかるへきを思へる心にやたつやと

人をとほりふし秋のなかはの別なれば朝霧も

立へきころにてあかしのうへのなかむらん折ふし

さこそとおほす心也

●糸あはせ

この人／＼のとり／＼にろんするをきこしめして左右

とわかせたまふ

「二二オ

一禪御説絵あはせは二度ありはしめはまつ梅つ
ほの御かたにてうちの御ゑにあはせ給へり後の
御てんにて梅つほの女御とこきてんの女御の
御絵にあはせ給ふ也此御注相違あるへからすた、し
うちの御ゑとみえたるところおほつかなしうち
の御ゑならは右にはいか、なさるへきや是又おほ
つかなしいかんのちのゑあはせはまされなし此
比は源氏廿九歳のころかいせんゑあはせも
うち／＼の儀なからむめつほときゆ殿の
女御の御絵をうす雲の女院の御かたなどにて
あはせられけるとやいふへからん

「二二ウ

●松かせ

しはしかゝる山かつの心をみたり給ふはかりの御契こそ
はありけめ天に生るゝ人のあやしきみつのみち
にかへらん一時に思ひなすらへてけふなかくわかれ
たてまつりぬ

「二二オ

この事まことにことはりおほつかなし天に生るゝ
人も先生なとは三途にまよふ人のしせん
てんしやうに生るゝこともあるへきかそれも又
三途に帰る事もあるへくや一時といへるはその
きさみのことならんかたとへはあかしのうへをまつ
天人になすらへてあかしの尼の腹にやとるを三
のみにち帰る時になすらへいへるにや又天上に
のほる事もあるへきの心を都へ帰るになすらへ
てなかくこゝをはなるゝ理にあたるへきかかくや姫

は月中の天人なりしかとかりにこの界に來り
て竹とりの子となりしかと八月十五夜の月に
乗してなかく竹とりか家をはなれし事など
になすらへてみ侍へくや

「二二ウ

こよなしや我もおもひなきにしもあらざりしを
なんとあさましうおほゆれといまことさらにと
うちなけさやきてまいりぬ

これは右近丞の藏人源氏の君帰京の後ゆけ
いのせうにてかうふり給はれるか源氏君あかし
のうへのほりてはしめておほゑおほしまし
ける時の御ともにてまいれるか御帰りの時御はかし
とりにまいれるかあかしのうへの女房に色／＼

「二三オ

の事なとかたりてたち出る時心のうちに思ふ事也
こよなしやとはあかしの上はよしきよか心をか
せいひし人なるを源氏君の御子をさへまうけ
てあかしよりのほりそのさまのかきりなき
きほひのあるをみて思へる心也こよなしやとは
その身のくわほうをほめたる心也我も思ひなき
にしもあらざりしをとはよしきよか心かけし
事をきゝておとこの心なれば我もその思ひ
ありし事をいま思出たる儀也これをよしき
よと花鳥にあそはされたるはもしおほしめし
たかへけるにや

「二三ウ

●うす雲

これはいとにけなき事もおそろしうつみふかきかた

はおほうまさりけめといにしへのすきはおもひやり
すくなきほとのおやまちにほとけ神もしるし
給ひけんとおほしきますもなをこのみちはうし
ろやすくふかきかたのまさりけるかなと

これは秋好中宮の六条院の御方におはし
ますとき源氏君まいり給ひて思かくるすち
の事なとほのきこえ給し時の事也これは
いとにけなき事なりとはすてに時の御門の
中宮にておはしませは也つみふかきかたは
おほうまさりけめともとは父御門の御時薄
雲の女院にしひかよひ給し事也されは
おそろしさもまさるへけれと年わかき時の
とかは神仏もゆるし給ひけるやの心也うしろ
やすくふかきかたのまさるとはとしをへて
遠慮なといてきぬるといふ心也

●あさかほ

いひこしほとになんときこえかゝるまはゆさよい
ましもきたる老のやうになとおほえまれ給ふ
身をうしといひこし程に今は又人のうへとも
なけくへきかなこの哥の心は我身のやうく老と
なる事をなけきこしにその比わかゝりし
人の又この比老となるをみて人のうへとも成
にけるかなと源内侍かいへる也是を源氏君
きゝ給て人の身の老ぬることのほとなさ
世のさかにて侍を源内侍かいましもきたる

「二四オ

老のやうにいへるをはかなく思給心もおよその
哥の心を今内侍かいへるさしあたりても心
得かたきにや

「二五オ

●玉かつら

君にもし心たかは、松浦なるかゝみの神をかけてちかはん
これは大夫の監か小貳の北のかたのところにき
たりて玉かつらの君の事を思ひかけてよめる
哥なりおは君の返し

年をへていのる心のかかひなは鏡の神をつらしとやみん
よめる心は年月この玉かつらの事をいかにも都に
のほせたてまつり父おとゝにもみせたてまつり又
しかるへき人にもあはせたてまつらん事を祈こし
にその心のかかひなは神をつらしと思はんといふ
心なりなにとなくかくよめるを監か心に我に
あはせしとする心そときゝていみしういかりて
おは君にとりかゝらんとしけるほとにむすめとも
このうたのことはりをつけかへて監にいひきかせける也
その心は姫君かたはのあるよしかねていひちらし
てをきける事をたよりにしていへりその心はいかやう
なるよきえむにもなんととしをへて神仏に
祈こしに大夫の監のかく心かけ給ふはうれしき
事なるを此姫君の人にみえ給ふへきやうも
なきことのあるをきこえひかめてよめるよしを
いひきかする也

「二五ウ

「二四ウ

「二六オ

仏の御中にははつせなん日のものうちあらたなる

しるしあらはし給ふともろしにたにきこえあなり
まして我國のうちにこそとをき国のさかひとと
としへ給つれは我君をはましてめくみ給てんとて
いたしたてまつる

このこと葉のうちまして我國のうちにこそは

とは日本の心也遠き国のさかひととも同じ

日のもとにおはしませは我君をはましてめく

み給ひてんといへり年へ給つれはといふうちに

「二六ウ

かなしひをつくすやうの○あるへきか又そのあひた

に観音をたのみたてまつる心もあるへしされは

我君をはましてめくみ給はんといふにや河海には

つせは房前卿のちからにて建立あれはといへりそれ

ならでも理侍へきにや

●はつね

れいのわたかつきわたりてまかてぬ夜あけはて

ぬれは御かた／＼かへりわたり給ぬ

わたかつきわたりては踏哥の人にいたすろくの事也

御かた／＼帰給ふとは物み給へるかた／＼の事也

「二七オ

●こてう

春のおまへの有様つねよりことにつくして匂ふ

花の色鳥のこゑほかの里にはまたふりぬにやと

めつらうみえきこゆ

かくいへるは紫上の御かたの事也ほかの里には

またふりぬにやといふ詞こゝははやふりたると

いふやうにきこゆこれ又ふしんなきにあらす

たゝほかの里にはあまねからぬにやといへる心な
るへししかれば春のおとゝによろつの色ふし
とゝのふ心侍へき也

「二七ウ

風吹はなみの花さへ色みえてこや名にたてる山吹の花^崎

この款冬のさきといへるふしんのかたあり名所

などにはみえすこそ小嶋かさきの款冬の花

などゝよめるも侍れはやまふきのさきとも

いひやし侍らんとゝし又名所にや

(以下、五行ほど空白)

おなしかさしをたてまつれ給ふ

一禪の御注には兵部卿は連枝におはしませは

おなしかさしとの給ふ也但いたう空みたれ

して藤花をかさしてなよひさうとき給ふと

ありそのおなし花をたよりにておとゝの君に

盃をたてまつり給へるにや

●かゝり火

こよひはさかつきなと心してをとさかりすきたる

人はゑいなきのつゐてにしのはぬ事もこそとの

給へは姫君もけに哀ときゝ給ふ

これは玉かつらのかたに源氏君おはしたる折

姫君のはらから頭中将弁已下三人笛吹など

し給へるをよひ給て物語なとせさせ給ふ時の事也

またこの姫君を我はらからともこの三人はしり

「二八ウ

「二八オ

給ぬを源氏君ゑいなきのつゐてにしのはぬ事もこそとの給へは哀このつゐてにうちもいて

給へかしと姫君のおほす心をあはれとき、給ふとかけりしたること葉にも絶せぬ中の御ちきりおろかなるましき物なれはにやこのきんたちを
めにもみ、にもと、め給へりといへり

「二九オ

●野わき

みつしによりて紙一卷御す、りのふたにとりおろしてたてまつればかたはらいしたしの給へときたのおと、のおほえを思ふにすこしなめなる心ちしてふみかき給ふ

これは野分のあしたあかしの姫君の方にタきりの君おはしたるつゐてに文かき給はん

とてこひ給へるにとりいてたるをいなこれはかたはらいしたとはひけの心也されとあかしのうへのこれをきゝていたしたる紙にかき給はすは

「二九ウ

ふみやり給ふかたの人させる人にてもなきやとおほさんとおほす心也北のおと、とはあかしの上のおほするかた也又云かたはらいしたとはすこし札儀の心也されとも明石の上のほとをおほすに
なめにも思なしてあそはしけるにや

かた野の少将は紙の色にこそと、のへ侍れときこきさはかりの色もわかさりけりやいつこの野へのほとりの花よなんとかやうの人々にもことすくなにみえて

かたの、少将とはは、き、の巻にいへる人也紙の色にと、のふるとはふみつくへき木草いつれ

「三〇オ

も紙の色なる花にてもなに、ても付へき
事とみゆさはかりの色も思ひわかさりけりや

とは我身のひけ也いつくの野への花よとは

いかなるにつくへきやとかへりていひ給へる心
にや一禪の御注にはいつくの野へのほとりにてありし
やらんかゝる色したる花はありしとおほめき

こたへ給へるなり夕きりの心にはかならずしも
しかるへからすいつれにても其時にしたかひたる
花に付へきと思ひ給へるにやと侍りいか、侍へき

「三〇ウ

●藤はかま

おなし野の露にやつる、藤はかま哀はかけよかことはかりも

この哥は夕霧の御おは大宮うせ給てのち玉かつらの君のかたへ六条院の御使におはしたるそのおり
すこし思ひかくるけしきをみえてこの哥をよ

めりおなしの、露にやつる、とは我も玉かつらも

大宮の孫にておなしのみををひ給へはおなし

野の露にやつる、と藤のやつれをそへて我

思を哀はかけよといへる也玉かつらは源氏君の

御子になり給へればきやうたいの心にて藤は

かまをそへいへり御返し

「三一オ

尋ぬるにはるけき野への花ならば薄紫やかことならまし
兄弟にはおはせとまことにはいとこにてまし
ませはなりさるによりよくたつぬれは遠き

ゆかりの心にてたつぬるにはるけき野への花ならば
はいへりうす紫やかことなましとはいと

こもおなしゆかりなれはうす紫といへりかこと、は
ゆかりをたのむへきたよりの心也かこち草の理也
女はみつにしたかふ物にこそあなれとつゐてをたかへ
てをのか心にまかせん事はあるましきことなりとの
給ふ

「三二ウ

是は源氏の、給ふ詞也玉かつらはわか御子にし給へ
れは三しやうのことはりは勿論なれとまことは
ちしのおと、の御子なれば次第をたかへて我ま、
にはすましきの心也

やことなきこれかれとしころをへてものし給へは
えそのすちの人かすにはものし給はてすてかてら
にかくゆつりつけ大そうの宮つかへのすちにらう
ろうせんとおほしをきつるいとかしこくかある
事也となん申されけるとたしかに人のかたり申侍し

「三三オ

これは玉かつらの父おと、の給へる事を源氏君
に夕きりのかたり申さる、也やことなきこれ
かれとは源氏のせつにおほすかた／＼をは、かりて
宮つかへにまいらせんとし給ふの心也らうろうと
は身を心にまかせてもたぬ心也これ宮つかへの儀也

●まきはしら
けにそこら心くるしけなる事とをとり／＼に
みしかと心あさき人のためにそてらのけんも
あらはれける

これはひけくろのおと、の心也いふ心はひけくろ
の本台の物のけにとしころわつらひ給へる
に石山の観音を憑て祈給しかとしるし

なかりき又玉かつらを我物にせんと心かけ
給し時おなし御寺に祈給へは事かなひける
後おほしあはする心也こゝろあさき人とは玉
かつらの心たてのやすらかに又あはれもふかく
思ふやうなるをほとけもまもり給ひけるとひけ
くろの思へる心也

みつ瀬河わたらぬさきにいかて猶涙のみのあはときえなん

この哥は玉かつらひけくろにあひ給て後源氏君
くやくしおほす心ありし比おりたちてくみは

「三三オ

みねともわたり川人のせとはた契らざりしを
とよみ給へりそれを玉かつらいたうはつかしく
おほすあまりにわたらぬさきにいかて猶きえな
ましとよめる心也みつせ川はかきりある時の
わたりなればた、いまのかなしさにわたらぬさ
きとはいへる也御てのさきはかりはなといふ事
このつきの詞也

●梅かえ

花の香は散にし枝にとまらねとうつらん袖に浅くしまめや」三三ウ
この哥は齋院よりたてまつらせ給ふ薫をむめの
散すきたるにつけ給ふといへり哥の心もひけ
の心なるをうつらん袖に浅くしまめやといへるは
たき物の匂ふかきやうにきこえ侍れは心得かたく

侍りこれは源氏君の袖をしやうくわんしてその袖には浅しましといふやうにいへりたゝし又うつ

らん袖にふかくしむへしとは心さしのふかき儀なるへし古今の哥に蟬の羽のよるの衣は薄けれと

うつりかこくも匂ひける哉といへる哥は心さしのふかき事をいへはその心にや侍らん

「三四才

花の香をえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめん

えならぬ袖といへる我袖の事にてはいかゝとおほえ

侍れと前の詞に身つからの御れうの御なをし

の御よそひ一くたりてふれ給はぬたき物なとあ

れはそれをかけてよめる也下句はあらは也

左大臣殿の三の君まいり給ぬれいけんときこゆ

是はこのすゑにやとり木の巻に今上の女二

宮の御母藤つほの女御また東宮の御時

よりまいり給ふとあり此れいけてんたるへ

きかおはします所の名などはあひかはる事

も年へし後なれはあるへきにや

「三四ウ

●藤のうらは

頭中将花の色こくことにふさなかきを折てま

らうとの御さかつきにくはふとりてもてなやむに

おとこ

紫にかことはかけん藤花まつよりすきてうれたけれとも

紫にかことはかけんとは夕きりの君我に心さし

なくてとしころへし事はつらけれとその恨

を是我姫君にかけたてまつらんとひけて

の給へる也むらさきを女の事にいへる事
つねの儀也

「三五才

弁の少将こゑいとなつかしくてあしかきをうたふ
おとゝいとけやけうもつかふまつるかなと打みたれ
給てとしへにけるこの家のとうちくはへ給へる御
こゑいとおかし

けやけしは尤といふ字也心は折にあふ儀也

このすゑに

あしかきのおもむきはみゝとゝめ給ひつやいたきぬ

しかな川くちのそこそいはまほしかりつれとの給へは

あしかきの哥を弁の少将のうたふ心は此哥の

こと葉にたれかこのおやにまうよこしまう

してと侍る詞あり夕霧のつゐにおとゝの心を

とり給ふ事もなきにこなたよりまけ給へる

事くちおしくおほしておやに申てといふ

詞のある哥をうたへりその心を夕きりさも

なき事ぞと思ふにより川くちのそこそさし

いらへまほしかりつれとの給ふその心は川くちの

いてゝわれぬやなんといふ哥あれはまもれとも

せきのあらかきまもれとも〇といふ詞につきて

かくいへる也一禪の御注おなしうたいの詞ながら

すこしあひかはれり

「三六才

●わかな上

又大納言の朝臣の家つかさのそむなるさるかたに

物まめやかなる事にはあなれとさすかにいかにそや

此大納言の事誰ともみえず

ひたふるにうちはなやきされはめるはいとおほくかす
しらぬまてとふらひつ、物思ひなける御あたりと
はいひなから

是は女三の宮の方にある女房のた、すまひ也

なにことものとやかに心しつめたるは心のうちあらは
にしもみえぬわさなれは身に人しれぬおもひそひ
た覧も又さらに心ちゆきけにと、こほりなかる
へきにしもうちましれはかたえの人にひかれつ、
おなしけはひもてなしになたらかなるを

又さらにといふよりおなし女房の中にもしち

ならぬ人のさま也それに心しつめたる人もうち

ましれはおなしけはひになりてしちならぬ

やうにみゆる事あるをなたらかなるとはいふ也

あしきにしたかふ心なり此二は世上の理也

た、あけくれはいはけたるあそひたはふれに心いれた
るわらわへのありさまなと院はいとめにつかすみ給ふ

是も女三の宮の女房のさまなりわらはと

侍れといつれも総の女房にわたる心なるへし

さるによりめにつかすみ給ふとはかける也

●わかな下

昔こそまつ忘れね住吉の神のしるしをみるにつけても

此作者人の不審ありすみのえをいけるかひある

なきさとはとまへにあかしの尼君よめり

これもおなし作者也ひとり^ことけりといへる

にてあらは也

たかむらの朝臣のひらの山さへといひける雪のあした

ひもろきは神の心にうけつらん比良の山さへ夕

かつらせり此哥は文時卿の哥也た、したかむらか

哥と此物語にはみゆかやうの相違つねに有事也

この物かたりにてはたかむらか哥にて用

春のことの音はみなかきあはする物なるをみたる、事
もやと

ふるき注にもその心みえさるものとことの音

はといふ本もありとやいつれにも不審是あり

尋へしある人の了簡云春は陽の時にてうき

たつ心あり秋冬は陰にて心もしつまる時也

物を学ふるも其儀ありされは春のことの音は

乱る、こともやといへるにやかきあはする楽に

みたれてはいかゝとなるへし隔句にいへるにや

けにりつをはつきの物にしたるはさもあるかし
などの給ひて

本朝には呂律と用催馬楽同じ唐には

律呂と陽をさきとす

さんは五かのしらへ

河海にしるせりたつぬへし

五六のはち

当時さんのことのつたへこわなし^(れカ)尋へし

ことしは三十七にそなり給ふ

源氏君当年四十七歳とみゆしからは紫の

いへるにや

（これが よしみⅡ文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程三年）

キーワードⅡ「宗祇」「源氏物語」「注釈書」

うへは四十たるへしされとも物かたりのならひその人をさかりにいひなす心つねの事にやある説

あふひの巻の三日の夜の事紫上十二といふ

儀あり但紅葉賀に十にあまる人のひいなあそひ

はいむよいしいへりなを新枕は十四なるへしかほるは

兵部卿の宮に一の弟なれとうき舟の巻にいたりて

宮より二三のこのかみといへり此たくひなるへし 「三九才

おきて行空もしられぬ明暮にいつくの露のかゝる袖なり

この哥のてにはある先賢の講尺にもてにはちか

へりしかはあれとその故あるよいしいへるにやたゝし

せんしうせんさい後撰集千載大和物語等に此たくひのてにはあり

河川^{（漢）}なかすね覚も有物をいらふはかりの露やなに也

思ひ出て音信しける山彦のこたへにこりぬ我やなに也

ゆゝとしていみける物を我ためになしといはぬはたかつらき也

このてにはきゝにくきやうには侍れと五音にて

相違なき歟昔はみな如此ありけるよし心ふへき

のみなり

「三九ウ

かゝるおりのらうろうならすはまいるましくけはひはつかしく思ふも

これは右衛門督女三宮に忍ひてあひ給へりし

後心のおに、源氏のかたへまいり給はさりしころ

紫の上の物のけにうせ給へるよしきゝてまつり

のかへさみにいて給ひしつゐてに二条院へ

まいられける時柏木の心也らうろうは人のおちめ

などのことをいへは源氏君のうれへの時まいる心を